

もろこしの人にとは、やふじのねの外には山のありやなしやとかたるにもよむにも盡きぬ言の葉の不二の山としよにつもるらん
西の海やもろこしさして行く船のうへにもふじはいくかみるらん
山をぬく人にはありともふじのねを見ては及ばぬものとするらん
わすれてはそらにも雪のつもるかと見れば雲間にはる、ふじのね
積りしはきのふのもちに消えはて、けさみなづきの不二のはつ雪
うつしゑを見るごとなれやふじのだけまた見るごとに寫繪もあり
これらにならへる契冲阿闍梨の百首、長流隱士の三十首、いづれもめづらしく巧によみかなへ
られたり、縣居翁の長歌、殊にたへにして、人麻呂赤人の長歌にもをさくおとれりとはみえず
ぞあるあがたるの長歌の反歌に、

するがなるふじのたかねはいかづちの音する雲のうへにこそ見れ
ふじのねのふもとをいで、ゆく雲は足柄山のみねにかゝれり

また記行の中に

いつのよのちりひぢよりかなりいで、不二ははちすの花と見ゆらん

三首ともに秀逸ときこゆる中に、あしがら山のうたは、五條三位のうたに、○歌

とあるにむかへみるに、こゝろおなじくて、歌がらは縣居の歌、たちまさりてこそおぼゆれ、又荷

田東萬侶大人の歌に、

き、よりも思ひしよりもみしよりもばかりて高き山はふじの根
又平高保が富士二百首といふものあり、契冲阿闍梨百首にならへるなるべし、其中の一、二をい
は